

## メッセージアウトライン

### ヨハネ16：25~33「勇敢でありなさい」

今までイエスはさまざまなたとえを用いて話されてきたが、もはやたとえでは話さないで、父なる神についてははっきり告げる時が来ると言われる。(25) その「時」とは弟子たちが聖霊に導かれて十分な霊的理解力を持つ時であり、それは使徒2章のあのペンテコステの日に聖霊が下った時以後のことである。その日には彼らが22,23節で教えられたようにイエスの名によって直接父なる神に求めるようになるのである。(26) 弟子たちはイエスに対する愛を持ち、またイエスが神のもとから来られた救い主であることを信じていた。そのことは父なる神の喜ばれることであり、またそのような弟子たちを神は愛してくださり、御子イエスの名による祈りに豊かに応えてくださるのである。(27)

「わたしは父から出て、世に来ました。もう一度、わたしは世を去って父のみもとに行きます」(28) もともとイエスは三位一体の子なる神として父なる神と共におられたお方であり、そのお方が神の救いのご計画に従って、処女マリヤの胎に宿り、この世に人として来られ、そして十字架の上で人類の罪の贖いを成し遂げられて後、もといた天に帰られるのである。弟子たちはイエスが話されたことが、今ははっきりと理解できるようになった。しばらく前に弟子たちはイエスが語られたことの意味が分からず、質問したがっていた。→17~19 イエスはそのような彼らの当惑もちゃんとご存じで20節以下でそれに答えられたのである。このような驚くべき霊的洞察力を見て、彼らはもはやイエスに尋ねる必要のないこと、つまりイエスが人の心の中まで読みとることのできるお方、神のもとから来られたお方であるという確信を持ったのである。(29,30)「あなたがたは今、信じているのですか」(31) 弟子たちは 確かにこれより以前に信仰告白をしていたが(マタイ16:16)、しかしそれ以後さらに彼らの理解が深まり、ここで改めて信じますと告白したのである。

「あなたがたが散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとり残す時が来ます。いや、すでに来ています」(32) たしかにこのすぐ後、ゲッセマネの園でイエスは捕らえられ弟子たちはみな逃げてしまう。かくしてイエスは敵の中にただひとり残されることになる。しかしイエスは言われる。「わたしはひとりではありません。父がわたしと一しょにおられるからです」(32) 誰が見捨てても、いつも父なる神がイエスと共にいてくださる。この事実の上にイエスは何ものにも動かされることのない平安を持ち続けることができるのである。人は裏切っても父なる神は裏切らない、見捨てない。そしてまたこのことは、私たちイエスを信じるクリスチャンにとっても同様なのである。

「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです」(33) それはこの世でどのような苦しみや患難が来てもなくすことのない平安である。「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです」(33)イエスはすでに世に勝たれた。イエスはこれから十字架へと向かわれるが、すでにその十字架において神の救いの計画のなることを確信してこのように言われた。世に勝たれたイエスを信じ信仰を持ってこの地上の生涯を勇敢に生きることが今、弟子たちに、そして私たちに求められているのである。 ロマ8:31~32,35~39参照